

新知事に翁長氏当確

辺野古反対に支持

移設計画影響も

任期満了に伴う第12回県知事選は16日、投票が行われ、無所属新人で前那覇市長の翁長雄志氏(64)の当選が確実な情勢となった。翁長氏は知事選で最大の争点となった米軍普天間飛行場の返還・移設問題で、名護市辺野古への移設反対を前面に打ち出し、普天間の5年以内の運用停止を掲げて移設推進を唱えた無所属現職の仲井真弘多氏(75)＝自民、次世代推薦、無所属新人で元郵政民営化担当相の下地幹郎氏(53)、無所属新人で元参院議員の喜納昌吉氏(66)との激しい選挙戦で幅広い支持を集めていた。



沖縄の岐路 2014知事選

本紙と共同通信が15日まで県内7市で計7千人余りを対象に行った期日前投票の出口調査や、16日に22市町村で計約1800人を対象に行った出口調査の結果に、取材を加味して分析したところ、翁長氏の初当選が確実な情勢となった。

選挙戦で翁長氏は、普天間の閉鎖・撤去や垂直離着陸輸送機オスプレイの配備撤回を求めた2012年の県民大会実行委共同代表を務めた経緯などから、全市町村長や県議会全会派が県内移設断念などを求め署名した「建白書」の理念実現、保守を超えた「オール沖縄」で基地問題解決に取り組む必要性を訴えた。

政党の推薦を受けずに出馬したが、県政野党の社民、共産、社大各党や生活の党などが全面支援。仲井真氏の辺野古埋め立て承認を批判して自民党から除名処分を受けた保守系の那覇市議団も全面的に選挙戦を支えた。

辺野古移設計画をめぐる政府は、8月に埋め立て工事に向けた海底ボーリング調査を開始。「仲井真知事から埋め立て承認を得た」(菅義偉官房長官)として選挙結果にかかわらず移設作業を推進する構えを見せているが、翁長氏は埋め立て承認の取り消しや撤回も検討する考えを示しており、移設計画の行方にも大きく影響しそうだ。

天間の閉鎖・撤去や垂直離着陸輸送機オスプレイの配備撤回を求めた2012年の県民大会実行委共同代表を務めた経緯などから、全市町村長や県議会全会派が県内移設断

打ち上げ式で両手を挙げ、支持者に最後の訴えをする翁長雄志氏(15日午後6時50分ごろ、那覇市の県民広場)

○詳細はあすの紙面をお読みください ○ryukyushimpo.jp ○購読のお申し込みは フリーダイヤル 0120-395069

保革超え賛同集める



演説後、有権者の元に駆け寄る翁長雄志氏
=10月30日、宜野湾市

「保革を超え、県民の心一つにした県政を」。翁長雄志氏(64)の兄助裕氏(故人)が、保守系候補として知事選に出馬した1994年11月に最後の街頭演説で訴えた一節だ。当時県議だった44歳の弟の胸に強く残った。

それから20年。兄の言葉は、「オール沖縄」「イデオロギーよりアイデンティティ」がみ合うのか。誰かが上から笑っていないか。政府が押し付けた基地をめぐり、県民同士が対立することのむなしさを心の奥で感じてきた。

だが自民党県連幹事長など県内保守政界の要職を歩み、革新との対決を重ねる中で、「保革一緒」とはなかなか言えなかった。積年の思いを自然と口に出せるようになった

のは近年、皮肉にもオスプレイ配備や普天間飛行場の辺野古移設で政府がさらに強権的な姿勢を強めてからだ。「県民の心がまとまる大きな背景が出てきた」。

妻樹子さん(58)は「復帰運動のすさまじさを知る世代ができる、最後の戦いだと思う」と夫の心中を代弁する。

「県民の心を一つにした県政を」

「保革を超え、県民の心一つにした県政を」。翁長雄志氏の政治理念と重なる。保革を超えた県民一致の政治を目指す姿勢は「翁長家の伝統」(翁長氏)として受け継がれてきた。

子どものころから政治家に憧れた。父助静氏は真和志市長、助裕氏は西銘県政で副知事を務めた保守政治家。ただ父と兄が出馬した計15回の選挙

がみ合うのか。誰かが上から笑っていないか。政府が押し付けた基地をめぐり、県民同士が対立することのむなしさを心の奥で感じてきた。

だが自民党県連幹事長など県内保守政界の要職を歩み、革新との対決を重ねる中で、「保革一緒」とはなかなか言えなかった。積年の思いを自然と口に出せるようになった

告示日の朝。夫妻は糸満市の魂魄の塔へ手を合わせた。戦没者の遺骨を収集して父助静氏らが建てた慰霊塔の前に「政治の原点は平和」との父の言葉を胸に誓った。政治家の目標としていた那覇市長を退任し、臨む戦い。政治生命を懸けて「命の限りを頑張る」と自身に言い聞かせている。

「保革を超え、県民の心一つにした県政を」。翁長雄志氏の政治理念と重なる。保革を超えた県民一致の政治を目指す姿勢は「翁長家の伝統」(翁長氏)として受け継がれてきた。

子どものころから政治家に憧れた。父助静氏は真和志市長、助裕氏は西銘県政で副知事を務めた保守政治家。ただ父と兄が出馬した計15回の選挙

がみ合うのか。誰かが上から笑っていないか。政府が押し付けた基地をめぐり、県民同士が対立することのむなしさを心の奥で感じてきた。

だが自民党県連幹事長など県内保守政界の要職を歩み、革新との対決を重ねる中で、「保革一緒」とはなかなか言えなかった。積年の思いを自然と口に出せるようになった

告示日の朝。夫妻は糸満市の魂魄の塔へ手を合わせた。戦没者の遺骨を収集して父助静氏らが建てた慰霊塔の前に「政治の原点は平和」との父の言葉を胸に誓った。政治家の目標としていた那覇市長を退任し、臨む戦い。政治生命を懸けて「命の限りを頑張る」と自身に言い聞かせている。

おなが たけし
翁長 雄志 (64)

プロフィール
1950年10月2日生まれ。那覇市出身。法政大卒。会社役員を経て85年に自民公認で那覇市議に初当選し市議2期、92年から県議2期務め、97年に自民党県連幹事長。00年に無所属で那覇市長に初当選して4期14年務め、今月退任した。

座右の銘
人生は、重荷を負うて遠き道をゆくが如し 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

好きな食べ物
いなむどうち、ゴーヤーチャンプルー、

マイブーム
選挙一色

趣味
屋上緑化、野球観戦

特技
石原裕次郎の歌の物まね

自分の性格 有言実行

尊敬する人物 野中広務、ジョン・F・ケネディー

好きなテレビ番組 ニュース、映画

好きな映画俳優 渥美清 「寅さんシリーズ」

好きな音楽 石原裕次郎「赤いハンカチ」

好きなスポーツ 野球

好きな本 トーマス・フリードマン著 「フラット化する世界」

子どものころ憧れた職業 政治家

好きな観光スポット 識名園



妻樹子さんとともに県知事選の投票をする翁長雄志氏(左) 16日午前10時30分、那覇市の大道小学校

翁長氏語録

県知事選で初当選を確実にした翁長雄志氏は、選挙戦の前から保守、革新の立場の違いを超えて基地問題の解決を政府に迫ることの必要性を強調してきた。

「(米軍基地を負担することで)ヤマトンチュにこれだけ操を尽くしている沖縄が、日本に甘えているのか。日本が沖縄に甘えているのか。県民の心一つに、沖縄から日本を変えるべきだ。県民が腹八分、腹六分までとまって展開しない限り、変えられない」(2013年4月25日、サンフランシスコ講和条約の発効を記念する政府の「主権回復の日」式典開催に関する公開討論会で)

今知事選でも「オール沖縄」「イデオロギーよりアイデンティティ」との理念を強調した。13年1月28日に米軍普天間飛行場の県内移設断念などを求めて市町村長らが署名した建白書を安倍晋三首相に提出したにもかかわらず、県内移設に向けた作業を強行している政府の姿勢を批判した。

「県議会や市町村長、市町村議長がそろって政府へ要請しても一顧だにされないようなことは、他の46都道府県では絶対ない。民主主義国家としての品位のなさだ。私たちは心一つに打ち破らねばならない」(知事選告示の10月30日、辺野古での第一声で)

「沖縄は基地を挟み、保守は革新に『お前たちみたいな理想論で飯が食えるか』、革新は保守に『あなたに命を金で売っているのか』といがみ合ってきた。それを誰か上から見て笑ってはいないか。沖縄だけに基地を押し込めている。私は何とか保守の側からは正しいと思っていた。沖縄がまとまる時が今だ」(10月26日、北谷町の集会で)

翁長氏が、過去に沖縄が保革を超えて民意を示した例としてよく引用するのが、1950年代前半の米軍による強制的な土地接収に端を発した「島ぐるみ闘争」と呼ばれる住民運動だ。演説では「戦後、県民の土地は銃剣とブルドーザーで強制接収された。県民が差し出した基地は一つもない」と切り出す。

「沖縄の人は当時、大変貧しく、のどから手が出るほどお金が欲しかったかもしれない。しかし保守、革新の政治家が一緒になり『うやふあーいふじ(先祖)からもらった土地は絶対に売らない』と土地四原則をつくり、(米側に土地代の一括払いの勧告を)撤廃させた」(1日、総決起大会で)